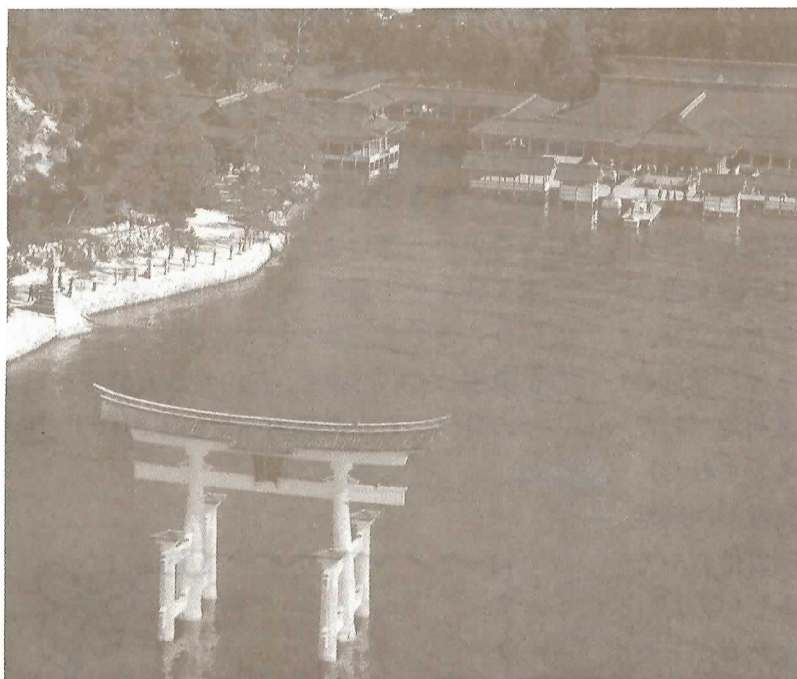


図書だより

＜第36号＞
 平成9年2月20日
 呉工業高等専門学校
 図書委員会



世界の遺産

「厳島神社の大鳥居のしくみ」

今の鳥居は、明治8年に作られたもので、高さ16.6m、主柱間隔約11mである。2本の主柱は、貫（ぬき）と呼ばれる水平材で剛に結ばれ、左右の安定を保ち、さらにそれぞれ2本の控え柱と2本の貫によって剛に組まれ、前後にも倒れないようになっている。また、砂地に丸太杭を打ち、その上に置いてあるだけだが、台風時のように3m近く水没し、激しい風と浪を受ける際にも流されることがない。実は、屋根のすぐ下の部分（笠木〔かさぎ〕という）は、箱状に作られ、中に砂利を詰めてあり、これが重石になっている。

目 次

〔読書感想文〕

歴史 「山霧」	C 1	守田麻里子	2
文学 「豚の報い：第114回芥川賞受賞作品」	A 2	土井由美子	3
政経 「偏見と差別はどのようにつくられるか」	A 3	橋本 悠	4

〔随想・読書雑感〕

「毛利元就」	E 4	新居 英紀	5
「図書館について」	A 5	北藤 架絵	6

〔新任教職員の随想〕

「読書について」	電気工学科	板東 能生	7
「新任図書館員からのお願い」	図書係長	藤井 武志	8
「私と読書」	施設係長	田中 宏	8
「歴史小説について」	人事係	入江 一之	9

〔お知らせ①〕

情報検索ニュース	図 書 館	9
----------------	-------	---

〔新着図書10選〕

.....	10
-------	----

〔お知らせ②〕

春休みの長期貸出と休館について	図 書 館	12
-----------------------	-------	----

〔編集後記〕	図書館長	池上 廉平	12
--------------	------	-------	----

読書感想文

歴史

「山霧」

(永井 路子 著)

C1 守田 麻里子

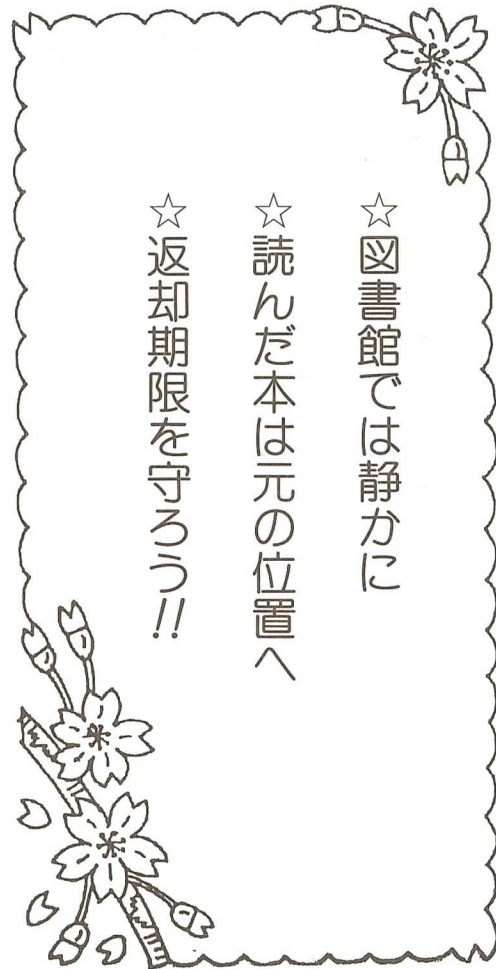
夏の宿題には何を讀もうかと悩んだあげく、わたしが住んでいる地域に関係あるものにしようと思ひ「山霧」という毛利元就に関する小説を讀みました。毛利元就とどう関係があるかというところ、わたしの住んでいる温品というところは、承久の乱前後ごろからしばらく、金子氏や温科氏ヌクシヤ(わたしの町「温品」の名前はこの一族からとられた)の領地として支配され、その後毛利元就が中国地方を支配するころには、その家来の熊谷信直やその子孫たちによって治められていたらしいのだけど、彼らに関する記録や小説などが全然なかったので、毛利元就にしたというわけです。

小説だから、どこまでがほんとでどこまでがうそかわからないけど、元就の性格・人柄が少しわかった気がする。元就はちゃんと自分のしたことによって自分を恨む人がいるということを知っている、人の心の動きに敏感な人なんだと思う。だからこそ、何に対しても、とても慎重に考えつくしてから行動にうつしていたんだと感じた。そんな人だからたくさんの危機を乗り越え、毛利氏をあんなに大きくすることができたんだらう。

それと、忘れてはいけないのは元就の奥さんのことです。どんなときでも元就を支えていたのは妙玖だと思う。自分の実家の吉川氏と毛利氏が争っていたときにも、『子供のため』と反対に元就を励ます強さを持っている妙玖は、元就とは違ったところすごいカッコイイと思った。子供を持つ母親は強いというけど、それはほんとうだと思ひ。子供を守らなければという思ひこそが妙玖の心の支えであり、元気の源だったんだとわたしは感じた。

昔の女の人って政略結婚させられて哀いそうだと思うしていたけど、妙玖を見て必ずしもそうではないんだ思ひ。妙玖は自分の人生に満足してたんじゃないかと思ひ。夫に愛され、子供を育てるという生きがいを持っていたからです。わたしは絶対に政略結婚なんかは嫌だけど、昔の人はそれなりに生きがいを探して幸せをつかんでいたんじゃないかと思ひます。

本を讀んで一番思ひたことは、女って強いな—ということ。本では夫を支える妻というところを重視していたので、昔の女の人姿が見えた。いつの時代でも女の底力っていうのはすごいんですね。



文学

「豚の報い」 (第114回芥川賞受賞作品)

(又吉 栄喜 著)

A2 土井 由美子

私は、この物語を読んで不思議な気持ちになった。最初は店に入ってきた豚のせいで魂を落としてしまった和歌子のために御願しに真謝島へ行ったのだけれど、そこの民宿で食べた豚にあたってしまって。これも豚がもたらした厄のせいなのかと思うと少し恐くなった。この時初めて豚はこんなに怖いものなのかと思ってしまった。

けれど、後になって豚のおかげでみんなが救われたと分かっておどろいた。はじめは悪いようにしか思われていなかった豚もあとになってかなり見方が変わったのではないかと思う。私もそう思う。

やはりこの物語は題のとおり、豚のおかげであると言えると思う。お店を経営している女たちは毎日人の話のよい聞き役で自分の思いなんか言えなかったし、言う人もいなかったと思う。でも、こうしてみんなで真謝島に行けて心の中の思いを言いあえたんだと思った。それはやっぱり豚のおかげではないのかなあと思う。豚がお店に入ってきたからこそ真謝島行きが決まったのではと思う。もちろん、御願が第一の目的で真謝島へ行ったのは確かだけれど。

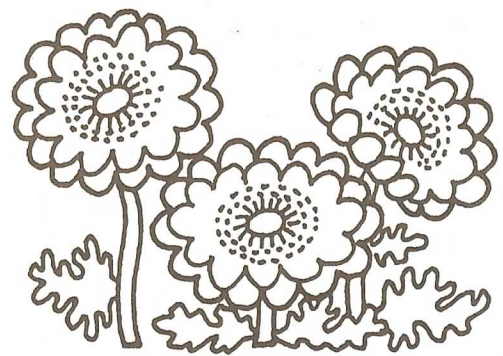
正吉のお父さんの遺骨で作った御嶽にはおどろいた。女たちは何か言ってその御嶽を信じないのかと思ったけれど、そうではなかった。実は私は少したがいたい気もちだったけれど、この正吉のような人だったら信じれたと思う。きっとこのあと、うまく御願できたんじゃないのかなと思う。

私が不思議に思ったことはやっぱり豚。最初お店に入ってきた時はみんなに恐れられていたのに。食事に出された時は何ともなく食べていたみんな。そのせいであたってしまって再び豚に恨みが。

でも最後には結局、豚のおかげだったということにみんな納得している。というように豚への気持ちがコロコロと変っている所に疑問を感じてしまう。人間だれしも豚にかぎらずそういう気持ちをいなく時があるのではないかと思う。私も日常生活の中であの時はこう思っていたのに今となればみたいなことがある。

あとになって思うけれど、一時期はその一部分しか見えていないけど、時がたてば他の部分も見えてきてまた考え方が変わっていくんだと思う。だから、一時の感情で物事を納得すべきではなく、ゆっくりと時間をかけて理解していけばいいのではと思う。

私はこの本を読んでこのように考えたけれど、実際そうかんたんには理解できないと思うけれど、少しずつ少しずつでも納得のいく毎日を送ってみたいと思う。



政 経

「偏見と差別はどのようにつくられるか」

黒人差別・反ユダヤ意識を中心に

(ジョン・ラッセル 著)

A3 橋本 悠

なぜ僕がこの本を読んだか？。僕はアメリカに留学し、多種民族社会であるアメリカ合衆国を身をもって感じて来た。アメリカは世界中の民族が集まっている。白人、黒人、黄色人種、南米人、他たちが住む中、僕は偏見や差を感じ、考えてきた。『差別なんか何でするんや、するやつアホじゃあ。』と今までは感じてきたが、それはそんなに簡単なものじゃないとわかってきた。差別をする心などないと信じていた僕だが、差別や偏見の心は意外と身近な所にある。今日、友達の家に行った時、僕の友達がやたら多い僕のホクロのことをバカにし友達3人がかたまって笑った。彼らは楽しさの欲にかられ、僕をみじめな物にさせることで仲間意識を得、優越感を得て笑いを増長させた。これも差別と言えるのではないだろうか。

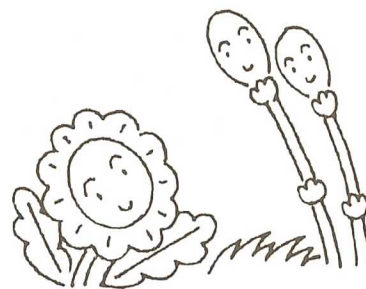
日頃、僕は田舎出身者をダサイと思い込み、彼らを嘲笑し差別することで優越感を得ていた。人種差別が何やらという前にもうこんな小さな所で差別が始まっているのだ。自分が思っていたより、これは僕のもっと胸の奥にあったのだ。差別心というのは誰の中にでもあるのである。差別心のない者はいない。僕らは差別の社会の中で生きている、時には自分すら差別してしまうこともある。かと言って差別を肯定していいものでもない。差別の歴史は深い。歴史上、現在にいたるまで、体力、知力、政治力をもった強い者たちが中心になり支配という形をとった。支配するものが優越感を得、支配される者はそれに劣等感を抱く、すると支配者は弱い者を支配される者に偏見を抱せ差別させ、彼らに優越感を与えさせ社会のバランスを取った。支配される者も、また自ら彼らを差別することで安心を得る。これで社会は成り立っていたのだ。さらに多数者が無知や偏見で少数を差

別してしまうこともある。

僕は人種差別などもうとっくに消滅したと思ってアメリカに行ったが、黒人差別を始めとしてまだまだ根強く残っていた。KKKなど過去の過ちであると思っていたらまだ実際に存在するのである。僕が南部のガスステーションでトイレに入った時、壁に「KKK KILL NIGGERS」と書かれていて驚いた。ホストシスターの白人の彼氏も「オレはニガーは大嫌いだ。」と豪語していたしほとんどが白人の学校にいた時、友達がジョークで「ニガー」と言っているのもしばしば聞いていた。実際に僕も言ったことがある。僕が黄色人種なので相手が僕を軽視していると感じることもたびたびあった。

KKK団のもともとは南部白人のプロテスタントから発生したと歴史の時間で本を読んだが、差別は宗教から来るところもある。古くから伝わるバイブルだけを信じ、自分たち以外は汚い物、野蛮であるなどの固定観念や偏見で差別を始めるのである。でもそれはたんなる無知である。それが何であるか知ろうとする前にそのような考え方の社会の中にいる人にとって差別は当然の事で正しいのである。知識を得るといふことの大切さを知った。

僕は今からも誰れかを知らず知らずのうちに差別していくだろう。しかしその裏には、無知、偏見、固定観念、誤情報などがある。自分自身に疑いをかけ自分を確かめながら人と接していこうと思っている。



随想・読書雑感

「毛利元就」

(童門 冬二 著)

E 4 新居 英紀

今年には毛利元就の生誕500年ということもあって、NHK大河ドラマでも毛利元就をやっているし、本屋に行っても毛利元就のことばかり宣伝していたので、それにつられて毛利元就の本を読んでみることにした。たくさんある種類の中で一番読み易い本にした。

今まで毛利元就というと「三本の矢」,「中国地方をおさめていた人」くらいしか知らなかったけど、この本を読んで「この人はとてもすごい人だったんだ。」と感動しました。

子供のとき名を松寿丸といい、小さいときに両親を亡くし、兄も京都に出仕を命ぜられなくなり、そして重臣に城と領地を横領されてしまい、孤独な身でした。その時松寿丸を助けたのが父の側室だった大方様という人物でした。この人は元就の大きな心の支えとなり、元就が元服して毛利家の当主となってからも、ずっと彼女が死ぬまで、元就の相談相手となって元就を助けた人です。とても元就がうらやましく思えました。

元就は武人として「戦略」を重視していた。戦争のときには「孫子」の「兵は詭道なり(合戦は騙し合いだ)」の考え方を、政治では「孟子」の「忍びざるの心」と「王道」を用いたとこの本ではいっています。また、元就は哲学だけでなく、いろいろな兵法書も読んだそうです。やっぱりこれくらいがんばらないとあの戦国時代では生き残れないし、強くなれないから必死になって勉強したそうです。だから「毛利元就は知謀家」といわれるようになったのだと思います。

毛利元就というとやっぱり「三本の矢」というイメージがあり、この本にも少し詳しく載っていました。三本の矢の教訓が出されたのは元就が死

ぬときではなく、彼が還暦の年を迎えた直後に出されたもので、しかも、息子達も四十代の壮年であったので今まで、「三本の矢」は死にそんな元就が小さな息子達に…という考えだったけどこれを読んでびっくりしました。でもこの「三本の矢」により毛利家は内乱など起きることなく、またさらに領地を広げさそうとせずに「いま持っているものを守り抜け」という教訓などによってずっと安定していました。

この本を読んで毛利元就という人物のことがよく分かったし、また歴史のこともずいぶん理解できたし、とてもいい本だと思った。読書はふだん「忙しいのでダメ」とか「マンガの方が面白い」などという理由であまりしなかったけど、実際やってみて、面白い本ははまるということに気がきました。これからもいろいろな本を読もうと思う今日このごろです。

春休みの
すこしがた



「図書館について」

A 5 北藤 架絵

今回、図書館について何か書くことになった。五年間を振り返ってみて私はまあまあ図書館を利用した方ではないかと思う。図書館は、毎日のように利用する人もいれば五年間 HR や授業以外ではほとんど利用したことがないという人もいるかもしれない。それはそれで私はいいと思う。

ところで、みなさんは本を借りたことがありますか。私はこの五年間で数えるほどしか借りたことがなく、この前久しぶりに借りて初めて気づいたことがある。本を借りるときに使うあの図書カードが新しく変わったこと。水色のカードになっていた。前は多分白だったと思う。いつ変わったのかは知らないが、今でも古いカードを持っている人は結構いるのではないだろうか。もしかしたら何処にいったのか分からないという人もいるかもしれない。

また、図書館でよく見かける一人のおばあちゃんを知っていますか。きっと何度か図書館に行ったことがある人なら、一度は見たことがあると思う。そう言えるくらいよく来ているおばあちゃんがあります。一体何処から来ているんだろうと見かける度に思うけど、学校外の人が利用してくれるなんて嬉しいことだと思う。このおばあちゃんは本を読むのがよっぽど好きなのか、単に暇だけなのかは知りません。

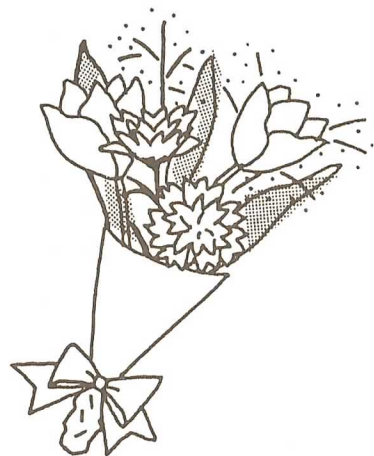
ところで、図書館を利用している人の数がどれくらいなのか私は知らないけど、LD によってその人数はかなり増えたと思う。LD が導入された初めの頃は、利用する人なんているのだろうかと思ってたけど、最近では多くの人が使っているようで、私自身も時々友達と観たりしている。場所さえつければもう一台くらい機器を増やしてもいいのではないかと思う。

さて、この図書館には利用者が極端に多い時期というのが年に四回ほどある。試験中である。この時期には普段空きだらけの机が満員状態になり、

すごい人数ではっきり言って勉強するのに適した環境ではなくなっている。でも、これは試験前にだけ勉強するという私を含めた呉高専生の姿を明らかにしている。

最後に、私は二年生の時にある一冊の本に出会った。それは“はてしない物語”という題の赤い表紙のとても厚い本で、読んだことがある人もいるかもしれない。その頃、借りて帰るには重たすぎるので図書館で少しずつ読んでいて、五年間のうちに絶対読み終えようと心に思ったことを覚えている。しかしそれ以来一度も読んでなくて、今となっては何処まで読んだのかさえ覚えていない。今度読むときはまた最初から読みたいと思う。

今、改めて高専の五年間が早かったことを感じている。そう思っている五年生も多いのではないだろうか。五年間、クラブやバイトで忙しいかもしれないけど、時には本を読んで自分だけの思い出の一冊を見つけて欲しいと思う。



新任教職員の随想

「読書について」

電気工学科 板東 能生

最近、私はあまり本を読まなくなりました。学術雑誌や技術解説は結構目を通してはいるつもりですから、本を読まないと言う表現は適切ではないかもしれません。けれども「読書」をしなくなったことは事実です。



自分なりに「読書」とは小説等のストーリーのあるものを読むことだと考えています。だから、前述の学術雑誌や技術解説は読書にあたらな自分なりに分類しています。

では何故このような分類をしているかというと、例えば新聞を読んで読書という人は居ないでしょう。新聞はある事実について客観的に記述し解説します。学術論文や技術解説も基本的には客観的な事実を報告し、それに対する著作者の解説を提供するものなので新聞と同類に分類しているからです。

逆に言えば、読書とは提供されたストーリーの中に自分を置いて感情移入するものだと私は考えます。そしてこの感情移入こそが読書にとって最も重要なことだと考えます。

一方、学術研究（特に物理学）の世界では第一に客観性を求められ、論理を要求されます。勿論、研究者も人間ですから様々な感情を持っていますが、それを前面に出すことはできません。

そのあたりの二面性をうまく使いこなせないことが私の「読書」をしない原因かもしれません。

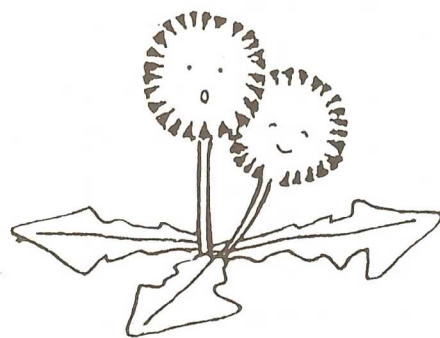
ところで、本校の学生を見ていると最近の若い世代の人たちは、（このような表現を使いだしたらもう年寄りになったということらしいが）非常に醒めた目で物事を見ているように感じます。

（まあ中にはもう少し冷静に物事を考えてほしい人も居ますが。）そこで学生諸君には文学全集などを読んでみることをおすすめします。

工業高専で文学というのも変かもしれませんが、いくら仕事が良くできて人間的な奥行きに欠ける人はすばらしい人物ではないと私は考えます。

そういった意味で既に評価の定まった文学集などはいろいろな意味に於いて深みのある人格形成に有効ではないでしょうか。一生懸命勉強するのも大切ですが若いうちにこそ人間を磨く努力も必要だと思います。

自分が読書をしないくせに他人に勧めるのは気が退けますが、読書は君たちには必要です。例えば、私の担当する実験のレポートは大変お粗末です。センスのない文章は評価の対象以前の問題ですから、日本人である以上はある程度の日本語のセンスも必要でしょう。良い文学作品を読むことは表現力を高めます。読書を通じてセンスを磨きましょう。



「新任図書館員からのお願い」

図書係長 藤井 武志

私は、昨年4月から呉高専でお世話になっています。それまでは、大学の図書館に15年ほど勤務していました。しかし、あらためて書くほど読書



歴がないので、図書館員としては失格ではないかと反省をしています。つたない読書歴の中から皆さんと同じ世代に帰ってみますと、高校時代は呉市立図書館（当時は陸上競技場の横にありました）へ通っては本を読んでいました。

大学紛争のはなやかな時代でした。高橋和巳の著作を知ったのもこの頃ですが、陸上部員である体育会系の私としては、友人に「タカハシカズミの「悲の器」を読んだか？」と言われて、巨人の投手が本を書いたのかと思ったものです。

その後、よく読んだのは五木寛之の作品です。呉高専の図書館にも当時読んだ全集があるので懐かしく思い出しました。その後、「村落社会学」を専攻していましたが、これは「きだみのる全集」の影響によるものでした。ですから、五木寛之の作品でも「風の王国」、最近では「日本幻論」等の“社会学もの”が印象に残っています。

図書館の仕事を希望したのは、その後「中井正一全集」を知ってからです。安芸津町出身の初代国会図書館副館長であった中井正一氏は、尾道の図書館で文化運動を広めたり、広島県知事選挙にも出馬しています。

みなさんは、技術という社会から最も必要とされる実学を習得されているわけですから、図書館を通して最新の科学情報をいかにして得るかということが、重要であると思いますし、卒業してからも必要となるでしょう。私からお願いしたいのは、もっと図書館とのかかわりをもっていただきたいということです。

「私と読書」

施設係長 田中 宏

今回読書に関すること
で原稿の依頼を受けて改めて考えてみると最近極端に本を読むことが少なくなっている事に気づきました。もともと余り読



書家でもなく、たくさんの本を読んでいたわけではありませんが、独身の頃はそれでも暇な時間があったためか吉川英治や司馬遼太郎の歴史小説を読んでいました。特に司馬遼太郎の「竜馬がゆく」「翔ぶが如く」「世に棲む日々」など明治維新の原動力になった人達を描いた作品を何作か読みました。彼の作品は、小説というよりは史実にもとづいて書かれたノンフィクションの傾向がかなり強く、つい百年ほど前の日本で実際に起きた出来事だと思いつい読みふけてしまったものです。これらの本は押し入れの奥のダンボールの中にしまっているはずですのでまた機会があれば読みなおしてみたいと思っています。

比較的最近読んだ本で一冊だけ非常におもしろかった本がありますので紹介したいと思います。NHK ブックスから出ている本で「木のいのち、木のこころ」という本です。これは法隆寺の宮大工の棟梁であった西岡常一氏の著書で世界最古の木造建築である法隆寺の建築に携わった飛鳥の工人達の木を扱う卓越した技術とそれを受け継いできた著者のおいたちを紹介した本ですが、近代の鉄とコンクリートで造られた無機質な建物、そして現代文明そのものに強い警鐘を鳴らしているように思えました。これは私の職業柄興味があっただけかも知れませんが、一度読んでみられてはどうでしょうか。

呉高専に通勤するようになって、電車のなかで揺られている時間が出来ましたので、又何か面白い本を探して読んでみようとおもいます。

「歴史小説について」

人事係 入江 一之

NHK で放映されている「毛利元就」を始め、歴史を題材とした小説やTV 番組はいつの時代も人々に愛され、一大ジャンルを形成しています。



当然の事ながらそれぞれの作品においては、その主人公側の視点や価値観により物語が構成されているため、同じ歴史上の人物を主人公としても全く別人のように性格が変わる事があります。

例えば「新撰組」を主人公とした小説の多くは彼らを悲劇のヒーローとして描いているようですが、坂本竜馬等を主人公とした作品の中ではナチスのゲシュタポのような印象を受ける事もあります。

一つの作品に対して読者の全てが同じ感想を抱く筈ありませんが、面白い作品ほど強いリアリティをもって、作家の意図するイメージを多くの読者に与えます。作品中の脚色や虚構を史実と混同する読者も世間には存在するようです。

どのような視点で描かれていても面白い作品は面白いのですが、出来るなら視点の異なる面白い作品をより多く読んで偏ったイメージを持つ事を避けてほしいと思います。それはなかなか刺激的な楽しみでもあるのです。

「情報検索ニュース」

「多機関OPAC 横断検索サービス」開始

九州大学の附属図書館ホームページに「多機関 OPAC 横断検索」が作成されました。

URL は、
<http://www.lib.kyushu-u.ac.jp/index-j.html> です。

この「多機関OPAC 横断検索」とは、複数機関の OPAC (オンライン蔵書目録検索) を同時に検索してくれるというすぐれものです。

すでに、大学、高専等では学術情報センターの「総合目録データベース」にそれぞれの図書、雑誌の所蔵を登録しつつありますが、それ以前に各大学、高専で作成された図書のデータベースは、それぞれ別々に検索しなければなりません。

従って、古い資料を検索する時には「多機関 OPAC 横断検索」が有効です。

現在のところ、検索対象機関は38機関で、同時に検索できる機関は5機関までです。

なお、呉高専図書館ホームページからリンクしている日本国内の大学図書館関係 WWW サーバからも入れます。

いずれ、「全国高専 OPAC 横断検索」サービスもできるのでは？



新着図書10選

「八人との対話」

司馬 遼太郎著 (文藝春秋)

歴史をふかく考察し、日本人とは何かを終生のテーマとして問い続け、独自の史観を確立した著者が、各界の碩学たち、山本七平、大江健三郎、安岡章太郎、丸谷才一、永井路子、立花隆、西沢潤一、アルフォンス・デーケン氏らと様々な角度からエピソードをまじえつつ語りあった、滋味豊かな対談集である。なかでも、アルフォンス・デーケン氏との対話「ユーモアを始めれば」に、私は強い感銘を受けた。(池上 廉平記)

「日本のオートバイの歴史」

富塚 清著 (三樹書房)

日本の自動二輪産業は現在では4社しか生き残っておりません。しかし戦後最盛期には町工場ともいえる120社以上が独特のアイデアで食うか食われるかの技術的・経営的な競争をしていた。こうした二輪産業の興亡について詳しく紹介されています。本書に登場する主なメーカーとオートバイは次の通りです。宮田製作所(アサヒ号)、日本内燃機(くろがね号)、陸王内燃機(陸王)、目黒製作所(メグロ号)、みづほ自動車製作所(キャプトン号)、富士重工業(ラビット)、新三菱重工業(シルバー・ピジョン)、トヨモーター工業(トヨモーター)、東京発動機(トーハツ)、鈴木自動車工業(ダイヤモンドフリー号、コレダ)、山田輪盛館(ホクス)、ホンダ技研工業(スーパーカブ、ドリーム)、新明和興業(ポインター)、昌和製作所(ライト・クルーザー)、ヤマハ発動機(ヤマハYA-1)、川崎重工業(メイハツ、カワサキW1S)…他。

(野村 高広記)

「国産二輪車物語」

小関 和夫著 (三樹書房)

各時代における代表的国産二輪26車種について章をわけ、左ページには車の説明、右ページには当時のカタログ、そして最後にスペック表の構成となっています。中でも当時のカタログは各メーカー特有の奇抜なアイデアが強調されており興味深いと感じた。(野村 高広記)

「乱世の智将・毛利元就」

古川 薫著 (中国新聞社)

元就は屈強の武将ではなく、歌(和歌・連歌)を愛し、妻を愛でて側室をもたず、数百騎の兵しかない立場で、やがて数万の武将を抱える尼子・大内を制して中国十ヶ国を支配する120万石の大名になる。この本は写真や地図を随所に入れて、当時を振り返りながら智将・元就の立場になって、西の桶狭間といわれる武田軍を破り、興亡を賭けた厳島合戦を制して西国の覇者になる過程をたどっていく肩のこらない歴史紀行である。

(若宮 正明記)

「シンクロトロン放射」

日本物理学会編 (培風館)

素粒子の一つである電子などの荷電粒子を超高真空中に排気したドーナツ状の円形容器の中で光速に近い早さで加速度運動させるとき、接線方向に電磁波を放射する。このことをシンクロトロン放射と呼び、この電磁波を放射光と言っている。放射光は連続した広い範囲にわたるエネルギーを持ち、指向性に富み、高輝度であるなど水銀灯やヘリウムランプなどの従来の実験室系の光源と比較して優れた特徴を持つ。すでに、放射光を利用した科学技術は著しい進歩を遂げ、基礎から応用の広い範囲にわたって利用され科学の進歩に役立っている。本書では、放射光の発生から利用にわたって詳細に説明がなされている。高専の諸君にも本書を通じて新しい科学技術の一端を知って欲しいものである。(植田 義文記)

「建設社会学」

柴山 知也著 (山海堂)

土木事業は人々の社会生活を向上させるためのものである。ところが土木工学の世界では研究対象が技術的領域に偏っていた。こここのところ、環境保全や景観について新しい理論が出てくるようになったが、著者は「従来の力学の枠組みに新しい要素を付加したものにすぎない」と手厳しい。本書は社会学の立場から土木を考えるための手引書。建設事業の執行制度や開発途上国協力、技術者教育などを研究事例にあげ、社会にとっての土木の意味を問い直そうとしている。

(阿部 康俱記)

「地球ウインドウズ」

土木学会編 (技報堂出版)

「地球ウインドウズ」は環境都市系の技術者を対象として、6つのウインドウで構成されている。I 歴史のウインドウでは地球環境問題の歴史を人間環境会議 [ストックホルム] から、環境と開発に関する会議 [リオ・デ・ジャネイロ] までの過程を中心にまとめている。II 課題のウインドウでは何が地球環境問題かという点を解き明かしている。III 知識のウインドウでは環境問題を理解する知識を準備している。IV 技術研究のウインドウではこれからの技術開発の方向を探ったものである。V 対策のウインドウは現在実行可能な対策の内容を展開している。VI 活動のウインドウでは世界各地の土木・環境都市事情に関する内容が盛り込まれている。本書は環境都市系の技術者にとって一読の書である。

(山口 隆司記)

「バリア・フル・ニッポン」

川内 美彦著 (現代書館)

著者は、本校の卒業生で一級建築士の川内美彦君である。

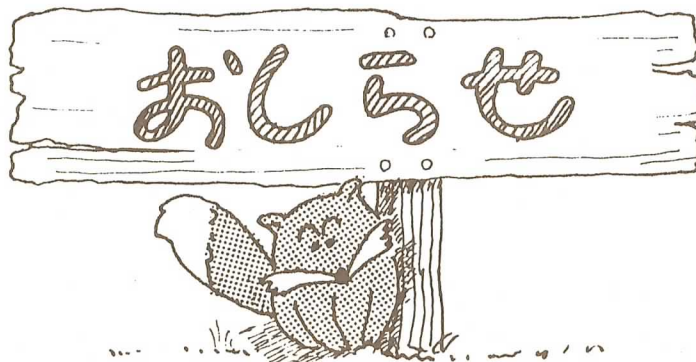
彼は学生時代の柔道の事故のために、車椅子生活を余儀なくされ、「障害者に優しい街づくり」の運動を展開しており、渡米時代の障害を持つ友人を招聘し、日本全国を講演旅行した時の話である。

駅の階段、エスカレータ、チケットの販売機、電車への乗降から始まり、飛行機の乗降、ホテルのユニットバス、講演会場へのアプローチ等々、日本は如何にバリアの多い国かを旅行体験を基に訴えている。また、バリアフリー先進国のアメリカの友人は、人間としてのプライドから、いろいろな場面で鋭い指摘をしていることも興味深い。バリアフリーの本質や日本人の障害者に対する関わり方等について、読者に課題を投げ掛けてくれる本である。

この本は、川内君の著書としては「先端のバリアフリー環境」(同時購入)に次いで2冊目であり、朝日新聞の「天声人語」にも採り上げられ、大きな反響を呼んでいる。

(藤井 健記)





春休みの長期貸出と休館について

1. 春休みの長期貸出

貸出期間 平成9年3月5日(水)
 ～3月21日(金)
 貸出冊数 一人 5冊以内
 返却期限 平成9年4月8日(火)

5年生の皆さんへの貸出取扱は、2月28日(金)まで行ないます。

2. 春休みの休館

作業のため、次の期間休館いたします。
 休 館 平成9年3月24日(月)
 ～3月31日(月)

上記休館日以外は、月～金9:00～17:00(土は休館)は開館していますので、利用してください。

～お詫び～

前号(第35号)に掲載しました、「呉高専OPAC」へ学外からのアクセスができず、ご迷惑をおかけしましたが、ようやく可能となりましたのでお知らせします。

URLは、

<http://www.kure-nct.ac.jp>

の呉高専ホームページにアクセスして、「施設・設備の紹介」の図書館をクリックしてください。

なお、ご質問等がありましたら、

Email: tosho@kure-nct.ac.jp までお寄せ下さい。

編集後記

先の「図書だより」〈第35号〉本欄の、本年度図書委員会の「図書館・図書の充実」への取り組み姿勢に関連して、その結果の一端をここに紹介します。新規購入図書は、当初予算内購入分として全教官より年2回推薦されたものと、学生諸君より購入希望のものを併せて約270冊、それに加えて、昨年度に引き続き本年度も全学科にご無理をお願いして拠出頂いた学生用図書購入費増額分による一般図書85冊、参考図書(辞書・便覧等)14冊、CD、LD13枚が追加され、その殆どのものが既に入庫しています。近々入庫の、英会話練習用LD「ENGLISH IN FOCUS」(英国版)にもご期待下さい。また、定期刊行物の新聞、雑誌類も見直して、これから激動の国際社会へ出てゆく学生諸君に役立つようにと、日本経済新聞、「MAINICHI WEEKLY」、インターネット・マガジンを新規に加えました。図書館は、本年度もこのように多くの図書が入り、ますます充実して来ました。ついでには、学生諸君の一人一人がこの偉大な宝を充分活用されるよう願ってやみません。そして先号の巻頭文で、長町校長が説かれた読書の習慣づけによる「創造的頭」への自己変革を期待します!

(図書館長 池上 廉平)